セクシュアリティのグローカルな構築へむけて
―　ジェンダー学関連の授業で語る女性性器切除　―

大　池　真知子

はじめに

表題にある「女性性器切除」は、アフリカ諸国を中心に古くから行われている施術で、女性器を切ったり閉じたりして加工する慣習である。私はアフリカをフィールドとするフェミニストの文学研究者としてこの問題を考察し、広島大学での講義でもさまざまな形で取り上げてきた。ひとつは、一般学生を対象にしたオムニバス形式の講義科目（総合科目「女と男の諸相」）で、ジェンダー学の基礎について学ぶ全15回の講義のうち、切除については１回のみで扱う。受講者は100名を超える。もうひとつは、専門の学生を対象にした演習形式の少人数クラス（「ジェンダー学演習」）で、半期をつうじて切除について取り上げる。アフリカのジェンダー構造について学ぶことをつうじ、みずからを規定するジェンダー構造について批判的に考えてほしい、というのがこれらの授業の意図だが、授業ではそれとは逆の反応に直面することがしばしばだった。たとえば、切除を人権問題として語ると、「アフリカではいまだに男性支配がはびこり、女はその犠牲者である」というように、アフリカ文化とそこで生きる女たちにたいする一方的かつ一面的な見方を助長し、それによって自文化を優位に置くことにつながってしまう。このような立場は、人権尊重を唱えながら、アフリカの女たちの人間としての尊厳を侵している。他方、そのようないわゆる普遍的人権主義の盲点を指摘しつつ切除を取り上げると、学生は文化相対主義に逃げこみ、切除はアフリカ文化固有の問題であり、外部者である

自分は関わりようがないと決めこむこともある。自他の関係に目をつぶるこのような立場は、相対主義といいながら、自文化を相対化するような視点を持っていない。アフリカにかんする基本的な知識のない学生にジェンダー学という枠組みで切除の問題を伝えるときに、どのような視点に立てば、ジェンダー構造にたいする気づきにつながるのだろうか。試行錯誤しながら、最近ようやく自分の位置取りが明らかになってきた。

そこで本論では、主として20歳前後の大学生にジェンダー学を教える者として、暫定的であるが私がたどり着いた立場を明らかにし、同僚と意見交換をはかりたいと思う。以下では、まず１節で切除の実態について説明し、基本的な理解を共有する。そのさい注意が必要なのは、ひとことで切除といってもバリエーションがあることだ。ここでの説明は、いくつかの主要な論文（Dorkenoo, Gruenbaum, Rahman and Toubia, Shell-Duncan and Hernlund, Toubia b, WHO）をもとにして、最大公約数といえそうな特徴をあげている。特定の論文の特定の記述によっているのでないかぎり、依拠した論文は逐一挙げないこととする。つぎに２節では、切除廃絶にむけてどのような取り組みがなされてきて、それが国際的にどのような軋轢を生んできたのかについて説明し、先進国の者が、人権侵害の側面を持つ第三世界の民族文化に関与するさいの問題点について考える。ここではとくに、フェミニストの連帯（シスターフッド）のあり方が問題になる。３節が本論の中心で、ジェンダー学関連の授業という枠組みで切除を取り上げるときに、有効だと考えるにいたった私の立場について説明する。それは一言でいえば、かの社会における異性愛中心主義の装置としての切除の働きに注目することで、かの社会とわれわれの社会を関連づけることが可能であるという立場である。最後に４節では、切除廃絶にめざましい効果を上げているセネガルのNGO、トスタン（Tostan）の活動を紹介し、有効な廃絶運動を考察する手助けとしたい。なお付言するならば、これまで私は文学のディシプリンでしか論文を書いたことがなく、本論での論じ方に問題があるのは承知している。それでもあえて同僚にむけて問題提起を試みたのは、

切除問題についてさまざまな立場からの提言を期待するがためである。

1．女性性器切除の実態

A．何が行われるのか

切除について説明する前に、切除されていないそのままの女性器について、切除を念頭に置きながら説明しておきたい（図1）。[1]まず全体を包むように存在する大陰唇と小陰唇だが、ともに膣開口部と尿道口を保護する役割を果たす。左右の陰唇がこすれても痛くないように、その内部は分泌物でしっとりしている。また、小陰唇は神経と血管の塊であり、当然、切れば大出血し痛い。つぎに上から順に、まず包皮の大切な役割はクリトリスの保護だが、それだけではなく、陰唇の動きにともなって動くことでクリトリスと摩擦を起こし、性的な興奮を高めるという役割もある

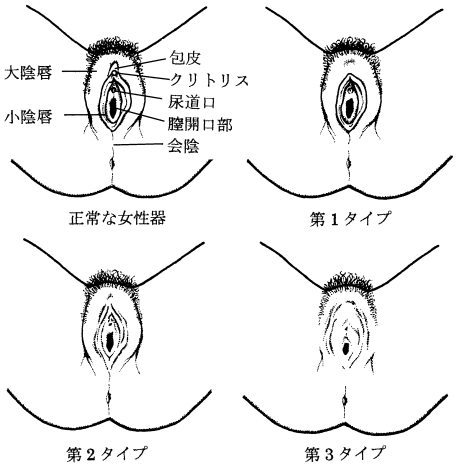

図1：性器切除のタイプ
オラインカ・コソ＝トーマス『女子割礼』掲載の図より転載（一部変更）

（Gruenbaum 36）。包皮の下にあるクリトリスは男のペニスにあたるもので、感覚器である。ペニスと同様、興奮すると勃起する。このことからわかるように、クリトリスも神経と血管の塊である。尿道口は筋肉組織であり、開閉する。したがって損傷すると開けっ放しになり、尿が垂れ流しになる。膣開口部は伸縮性に富み、月経、性交、出産というさまざまな役割を果たす。やはりこすれても痛くないように、内部は分泌物でしっとりしている。会陰も筋肉組織で、とくに分娩時は大きく伸縮する。

それでは性器切除では、どこをどう切除するのだろうか。切除はたいていの場合、大きく３つのタイプに分類される（図１）。第１のタイプは「割礼」（circumcision）または「クリトリス切除」（clitoridectomy）で、クリトリスの包皮の一部ないし全体を切除する場合と、包皮に加えてクリトリスの先端ないし全体を切除する場合とがある。前者のやり方はペニス先端の包皮を切除する男子の割礼に相当し、女子割礼と呼ぶにふさわしいが、行われることはほとんどない。第２のタイプは「切除」（excision）で、「中間タイプ」（intermediate）とも呼ばれる。クリトリスだけでなく、さらに小陰唇の一部または全部を切除する。実施されている性器切除の８割をこのタイプが占める。第３のタイプは「陰部封鎖」（infibulation）で、大陰唇まで切除し、月経血と尿の出る穴を残して全体を縫合する。縫合の程度はさまざまである。初めての性交のときに縫合部分を夫が十分に開くことができない場合、産婆や切除師などが刃物で切開することもある。出産のときにはさらに広く切開する。出産後に再度縫い縮めることも多く、その場合、出産のたびに切開と縫合を繰り返すことになる。このタイプは性器切除全体のおよそ15％を占める。

分類についていくつか注意点がある。まず、一般的な性器切除の説明にのっとってここでも便宜的に３種に大別したが、３つの種類の区別はつけにくく、相互に連続性があるということである。たとえ同じ民族グループであっても、地方によって、また施術師によってもバリエーションが豊富であるし、麻酔なしでおこなう場合は切除を受ける側の抵抗によって切除

の範囲は変化しうる(Toubia a)。したがって第１・２タイプと第３タイプという２つのグループに分類することを提唱する研究者もいる（Toubia a, Gruenbaum 3)。もうひとつの注意点は、ほとんどの場合は性器の一部切除である第２タイプが行われるということである。陰部封鎖がショッキングなので、性器切除の説明をするときにその残酷さを訴えるために強調されがちだが、陰部封鎖はむしろ少数派である。もっとも性器切除は民族グループごとに行われる慣習なので、民族グループによっては陰部封鎖が高率で行われることにも注意しておきたい。

B．切除の結果どうなるのか

切除の結果は多岐にわたるが、ここでは一部を挙げるにとどめる。まず直接的には、出血、感染症、排尿困難などが起きる可能性がある。長期的には、失禁（尿道損傷のため）のほか、月経困難、排尿困難（いずれも陰部封鎖の際に作られた穴が小さすぎるため）などが起こりうる。さらには排尿障害によって膀胱、尿道の感染症が起きたり、骨盤周辺の慢性感染による不妊症、膣口が固いための難産、難産ゆえの瘻孔（膀胱と膣の間に穴が開き、尿が膣に漏れ出したり、また直腸と膣の間が裂けて、便が膣に漏れ出したりする症状）など、さまざまな症状が生じうる。なお、第１、第２タイプの切除の結果は直接的なものがほとんどだが、なかには感染症や出血が繰り返されたり、腫瘍が形成されたり、難産になったりすることもある（Toubia b 13-6)。

他方、心理的な影響はまだよく調査されていない。[2]切除のことにかぎらず、性的なことを他人に語るのは容易ではないからであろう。いずれにしろ、自分の身体の一部を切り取られたことからくるネガティブな影響だけでなく、社会の一員となったことからくるポジティブな影響の両方を考える必要がある。

C．だれがだれに切除を行うのか

このような話をはじめて知った読者は、アフリカの「未開の部族」が行っている珍しい慣習だと思うかもしれない。ところがそうではない。統計の出所によって差はあるものの、多くの報告で、切除を受けている女の数は１億を超えるとされている。これは世界の女性人口にならしてみると25人に１人程度になり、大変な規模であることがわかる。国別に見ると、アフリカの54カ国中28カ国ならびにアラビア半島に位置する中東諸国の一部を中心として（図２）、アジアのイスラム地域の一部でも行われ、中南米の先住民のあいだでも報告があり、先進国でも切除実施地域からの移民のあい

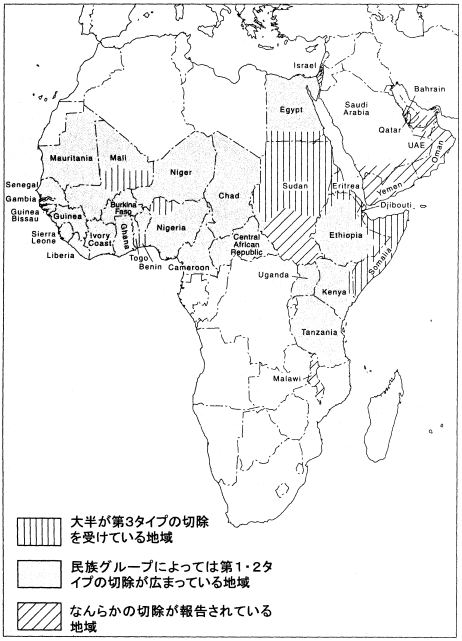

図２：アフリカとアラビア半島における性器切除
エフア・ドルケヌー『手折られたバラ』掲載の地図より転載

だで行われている。[3]

施術者であるが、伝統的な専門の技術者がいたり、産婆が行ったりすることが多い。共同体の住民のこともあれば、流しの施術者のこともある。ほとんどの場合施術者は女だが、なかには男の仕事となっている地域もある。裕福な家の娘の場合、近代的な器具を使って医者が行うこともある。村で行う場合は不衛生な環境であることが多いので、医者が替わりに行うのは現実的な解決法のようにも思えるが、近代的な医学のお墨付きを与えて切除を固定化させるとして、活動家のほとんどは反対している。なかには健康の面から、あくまでも移行措置としてではあるが医療化を肯定する研究者や医療関係者もいる（Mandara, Shell-Duncan et al）。

切除の対象年齢もさまざまで、乳児期、児童期、思春期、婚礼直前あるいは直後、第一子妊娠中、第一子出産後などである。それぞれの民族グループで「理由」とされているものによって異なるが、４～10歳が多い（Toubia a 712）。全体をつうじて、低年齢化する傾向にある。

D．何が理由とされているのか

切除の理由は民族グループによって異なるが、たいていの場合、いくつかの理由がからみあっている。[4]あえて分類すると表１のようになるだろう。いくつか補足しておくと、まず性的な理由として処女性の保障があげられているが、実際には婚前交渉によって縫合部分が損傷したとしても、ひそかに再縫合することは可能である。現実に処女かどうかよりも、むしろ切除を社会が目撃し、社会が「この娘は処女だ」と認識することに意義があると思われる（Gruenbaum 46）。また、女の性行動の抑制という理由の裏には、切除をせずにそのままにしておくと女は性欲過剰になるという考えがあることはいうまでもない。

通過儀礼については、しばしば文化人類学で強調されがちだが、すべての民族グループが通過儀礼の一環として切除を行うわけではない。とくに

性的な理由	——処女でいさせる。女の性行動を抑制する
健康上の理由	——多産のため。（分泌物を抑え）清潔を保つ
審美的な理由	——切除された性器は美しい
社会的な理由	——少女から大人の女へ移行するための通過儀礼
宗教的な理由	——宗教上の義務。じっさいにはイスラム教徒、キリスト教徒、土着の宗教の信者などのあいだで行われている

表１：切除の理由　　**著者作成**

陰部封鎖は、通過儀礼として行われることはほとんどない。通過儀礼の一環として行う場合、切除を受けないと一人前としてみなされず、社会の一員として生活できない。具体的には畑仕事などの共同作業ができなかったり、公の会議での発言が許されなかったりする。

また、宗教的な理由として、しばしば切除がイスラムの宗教的な義務のひとつだとされるが、アフリカでは切除はイスラムの伝播以前から行われており、イスラムが広まる過程で切除がその教えのなかに取りこまれたのだと考えられる。メッカのあるサウジアラビアでは切除はほとんど行われないこと、さらに神学者たちは切除がイスラムの教えではないと宣言しており、イスラム復興運動においては切除が非イスラム的だとされ廃絶に向かう場合もあれば（Gruenbaum 44, 63-4）、逆に原理主義が切除を勧める場合（James and Robertson 10）もあることからも、イスラムと切除の結びつきは恣意的なものと考えられる。これは切除とイスラムを分離させるのが容易であることを意味するのではなく、むしろイスラム教徒としてのアイデンティティが各地方の文化や慣習と分かちがたく結びついていることを意味する（Johnson）。

しばしば挙げられる疑問は、実際には難産や不妊症になることもあるのに（Balk）、なぜ多産を祈って切除が行われるのか、というものである。これは、女のセクシュアリティにおけるクリトリスの持つ意味を考えてみると明らかになる。男の場合、ペニスが感覚器と生殖器の両方をかねてい

るが、女は主として、クリトリスが感覚器で膣が生殖器と役割分担している。切除は女のセクシュアリティを快楽と生殖に二分し、前者をつかさどるクリトリスを切除して、女のセクシュアリティを生殖に還元するのである。切除を行う社会では「クリトリスを切除しないとペニスみたいに伸びて女はふしだらになる」（エチオピア、シエラレオネなど）「切除をしていない女とセックスすると夫が死ぬ」（マリ、ケニヤなど）「分娩のときにクリトリスに赤ちゃんが触れると、赤ちゃんが死ぬ」（ナイジェリア、ブルキナファソ、マリなど）などと言われる。もちろんこれらを皆が固く信じているわけではないし、教育によって迷信だと理解がされても、昔から社会で広く言われてきたこととして、なんらかの形で人々の認識と行動を規定しているのは確かであろう。いずれにしろこれらが意味するところは、女のセクシュアリティは受身であるべきで、クリトリスに象徴される欲望は、膣に象徴される生殖をおびやかすということである。クリトリスのある女、すなわち自分の欲望を持っている女は、出産に向いていない。そんな女とセックスしたら男は大変なことになる。だからこそ多産を祈って切除が行われるのである。

2．廃絶へむけての取り組みとその問題点

A．当事国内外における廃絶運動

切除を廃絶するために、当事国で、そして国際社会で、さまざまな取り組みがなされてきた。まず、当事国外の勢力を主体にした廃絶運動の趨勢を見ていこう。1970年代後半に活動が本格化するまでは、国際社会の動きはがいして鈍かった。植民地時代には、さまざまな形で教会や植民地政府により禁止措置がとられたが、効果は限定的で、ケニヤのようにかえって切除を広めた場合もあった（Thomas, Presley, 荻原 b, 額田）。また国連機関では1952年にはじめて、国連女性の地位委員会で切除が議題に上り、

1958年にはECOSOC（国連経済社会理事会）からWHO（世界保健機構）に取り組みが提言されたものの、WHOは、切除は社会と文化の問題でWHOの取り扱う範囲にはないと宣言した（Dorkenoo 60-1, ECOSOC 3）。

国際的な廃絶活動が本格化したのは、「国連女性の10年」（1975－85年）の時期である。WHOはようやく1979年に、切除をテーマに国際会議を開催し、それまで各地で進められていた草の根の活動を後押しした。さらに1982年には、切除廃絶にむけてWHOが積極的な役割を果たすことを国連人権委員会に正式に表明している。海外を拠点にする有力なNGOが活動を始めたのもこの時期で、1975年、米国のWIN（女性国際ネットワーク）は機関誌をつうじて切除の実態を報告しはじめ、WIN代表のフラン・ホスケン（Fran Hosken）は、1979年に包括的な切除の調査を発表して以来、改訂を重ねて大反響（批判もふくんで）をよんできた。また1983年には、ガーナ出身のエフア・ドルケヌー（Efua Dorkenoo）がイギリスでFORWARD（女性健康調査開発基金）を設立し、イギリスとアフリカでの廃絶活動に着手している。さらに「国連女性の10年」の中間会議が1980年にコペンハーゲンで開催され、そのNGOフォーラムでは、切除が大問題として取り上げられた（後述）。

1980年代にジェンダーの視点から法的な公私概念が問い直された結果、「私的」な場所で「私人」が犯す暴力にたいしても国家が法的な責任を問いうるという思想が形成され（Rahman and Toubia 10-1）、90年代には、人権の立場からの国際社会による介入が広く容認されるようになった（Boyle）。たとえば、1990年には国連女性差別撤廃委員会によって切除廃絶の勧告がなされ、1993年にウィーンで開催された世界人権会議では、切除を想定したうえで、国連人権規約のなかに「性差別に基づく暴力」の項目が入れられた。さらに翌1994年にカイロで開催された国際人口開発会議では、国連主催の会議ではそれまでになかった強い口調で切除が批判された。ウィーン会議とカイロ会議で切除が焦点化されたのは、フェミニスト活動家たちによるロビー活動の成果だが（Rahman and Toubia 11）、こと

にカイロ会議においては、米国の主要メディアであるCNNがエジプトで行われている切除をセンセーショナルに報道したことで、米国の世論が動いたことも、切除を問題化する大きな要因となった。さらに遠因としては、アフリカ系米国人の小説家であり活動家でもあるアリス・ウォーカー（Alice Walker）が小説やドキュメンタリー・フィルムで切除問題を情緒的に訴えて世論を熟成していたことも見逃せない。[5]さらに1995年に北京で開催された第4回国連世界女性会議では、行動綱領に切除廃絶が挙げられた。日本では、その後の1996年に、ウォーカーの作品の翻訳者であるヤンソン柳沢由実子が中心となってWAAF（FGM廃絶を支援する女たちの会）を結成し、当事国のNGOを支援すると同時に、日本での啓蒙活動を始めている。また90年代後半からは、先進国で切除禁止法が制定されたり、刑法に切除禁止条項が加えられたりして、切除実施地域出身の移民を想定した法律が整備されつつある。[6]

一方当事国での動きとしては、1957年にエジプトの女性運動誌が切除の調査をし、廃絶を訴えた例（El Hadi 154）、1950年代にスーダンでSWU（スーダン女性連合）が結成され、廃絶活動をした例（Abusharaf 165）などがあるが、女の健康と人権に視点をおいた運動が各地で活発化したのは、やはり1975年の「国連女性の10年」開始の頃である。たとえば、1950年に設立されたエジプトのCEOSS（コプト福音主義社会奉仕組織）は、60年代から共同体で保健活動を始め、1978年にはじめて切除を取り上げて以来、切除廃絶に焦点化した活動を行っている（El Hadi 155, 内海138-48）。またこの時期、国を越えたNGO間の連帯も模索され、1984年には、ユニセフ、WHO、UNFPA（国連人口基金）のサポートを受け、当事国の女たちが中心となってアフリカ地域をまたがるNGOグループ、IAC（インターアフリカ委員会）が発足。廃絶にむけて女たちを支援し、人々に知識を広め、産婆や施術者を再教育し、共同体の有力者や宗教指導者に働きかけ、政府にロビー活動をしている。

1990年代になると、アフリカ主導の取り組みが国内外で影響力を見せる

ようになる（Rahman and Toubia 11）。1995年に北京で開催された第４回国連世界女性会議では、切除廃絶に取り組むアフリカのNGOが切除廃絶を積極的に訴えた。また1997年以降、セネガルのNGO組織であるトスタン（後述）の支援によって、村単位での切除廃絶宣言が広がりつつあり、さらにIACがその活動を認められて1999年にノーベル平和賞にノミネートされるなど、NGOの草の根の活動が成果を見せはじめている。

下からの廃絶活動が実を結ぶ一方で、とくに1990年代後半からは、国家レベルでの教育キャンペーンや切除違法化の取り組みが活発化した（Boyle 85-7）。各種の国際協定はいうにおよばず、「人権と民族の権利にかんするアフリカ憲章」（1981年締結）や「子どもの権利と福祉にかんするアフリカ憲章」（1990年締結）などのアフリカ地域協定をもとに、当事国で切除違法化が進められた。さらに前者憲章の付随書として2003年に締結された「アフリカの女性の権利にかんする付随書」では、切除を違法とすることが明確にうたわれており、政府レベルでの包括的な措置がさらに進展するのが期待される。

B．取り組みの問題点――国際的なフェミニストの連帯（シスターフッド）

このように、切除は当事国ならびに国際社会で取り上げられ、問題とされてきた。切除を廃絶すべきだという点では、よほどの文化相対主義者でないかぎり意見は一致するが、とくに異文化の者が廃絶へむけていかに取り組むかという点では、議論がある。[7]

このことは、施術の呼び名をめぐる議論ひとつをとってみても明らかである。[8]かつて切除は女子割礼（Female Circumcision）と呼ばれていた。一般に割礼といえば男子のそれが想定されるが、共同体によっては女子にも同じような儀式が行われるため、このように呼ばれたのである。しかし実際の施術は男子の割礼とはまったく違い、むしろ去勢に近い。したがって施術を女の人権侵害とする立場から新たにつけられた名称がFemale

Genital Mutilation（略称FGM）である。[9]もとになっているmutilateという動詞は、処罰などの目的で残虐な方法で手足などを切断し、使い物にならなくするという意味を含む。割礼と呼ばれてきた施術をこう呼びかえたことで、この慣習の性格が明らかになった。しかし、とくに部外者が文化背景を理解せずにこのように非難することにたいし、当事者のあいだで反発があったため、1990年ごろからより中立な名称であるFemale Genital SurgeryないしはOperationも使われるようになり、最近はFemale Genital Cutting（略称FGC）が目立ってきている（Gruenbaum 4）。UNFPAも現在はFGCを使用している。切除の文化的・社会的な側面を強調するためにあえてFemale Circumcisionと呼び直す論者（Nnaemeka, Obiora b, ともに在米ナイジェリア人）もいるぐらいである。その一方で、WHOをはじめとする国際機関や、多くの活動家たちはFGMを使用している。たとえば上述したIACは、1987年にFGMという名称を採用することを大論争のすえ決議しており、またFORWARDやWAAFもその立場である。私自身は、英語で書くならcuttingを使い、日本語で書くときは「女性性器切除」（短く「切除」）を用いている。operationやsurgeryを使わないのは、それらの名称があいまいであり、また近代的な手術を思わせるためである。[10]またmutilationについては、当事者の女たちが、それまで割礼と呼ばれていた施術をmutilationと呼びかえた勇気には深い感銘を受けるものの、社会での施術の位置づけからすると、mutilationは誤解を招く表現だと考える。実際、母親をはじめとする保護者が、共同体で成人する娘のためを思って切除を行うのであって、けっして娘を傷つけるために行うのではない。だからこそ性暴力のなかでも廃絶が難しく、この点を理解したうえでのアプローチが不可欠である。

切除の位置づけをめぐる論争を象徴する出来事としてしばしば取り上げられるのが、1980年にコペンハーゲンで開催された国連世界女性会議である（Johnson-Odim, Bouleware-Miller 171–2, Cagatay）。NGOフォーラムの席上で、欧米のフェミニストが「野蛮な慣習」ないし「遅れたアフリ

カ文化」という言い方で切除を非難したのにたいし、廃絶のために闘ってきた当事国のフェミニストが反発したのである。この対立はフェミニズム運動の歴史の点から見ておく必要がある。いわゆる第二波フェミニズム運動は1970年代に世界的な潮流となったが、10年後の1980年代には、それまでの運動が白人中産階級中心であったと第三世界のフェミニストが批判したのである。たとえば、アフリカの視点重視を謳うAAWORD（アフリカ女性調査開発協会）は、1980年に切除問題にかんする声明を発表し、コペンハーゲン大会を例の一つに挙げたうえで、先進国のフェミニストによる一方的な介入を強い口調で非難している。コペンハーゲンでの対立は、その後の切除をめぐる論争において、ひとつの重要な参照点となっているのである。

コペンハーゲン大会前後の70年代から80年代の論争に続く、90年代から現在にかけての論争も、切除問題の位置づけをめぐってフェミニストどうしが対立するという基本的な構図は同じだ。しかし大きな違いは、国内外での廃絶運動におけるアフリカの役割が増した結果、外からの「介入」にたいする批判が下火になった一方で、論争のおもな舞台が、先進国の国内に移ったことである。すなわち、グローバル化による移民の増加という社会背景のもと、移民受入れ国である先進国が、民主国家としていかに少数者の文化を保持し、かつ人権を保障するかという国内問題として取り組まざるを得なくなったのだ（Lewis note 7）。[11]これまで切除のことはもちろん、切除を実施している社会のことについてほとんど知らなかった先進国の国民は、主要メディアのセンセーショナルな報道によって、「アフリカにいまだに残る女性差別」について啓蒙され、憤った。同時に、切除禁止法を制定する議会で、また切除回避を理由とする亡命を審理する法廷で、「アフリカにいまだに残る女性差別」は糾弾された。この言説自体の差別性にたいし国連人権委員会は憂慮を示し（ECOSOC 16-7）、第三世界のフェミニストだけでなく先進国のフェミニストもまた、自文化の植民地主義に批判的な眼を向けた（James and Robertson）。米国の切除論争では、トーゴ

出身のファウジーヤ・カシンジャ（Fauziya Kassindja）の事例が焦点となった。カシンジャは1996年に切除回避を理由とする亡命を許可されるが、彼女の弁護活動をつうじて、1996年に切除禁止法が米国連邦議会で可決された。カシンジャはメディアの注目を集め、日本でもその手記が翻訳された。一方フランスには切除禁止法はないが、刑法によって切除は裁かれてきた（Winter）。記憶に新しいケースでは、1999年、切除を受けたマリ移民の少女が、成人後に親と切除師を訴えた結果、切除師は48人の切除を実行した罪を問われて８年の実刑判決を受けた。そのときに問題になったのも、普遍的人権と少数者の文化の権利の対立であった（Weil-Curiel）。

C．日本での論争

日本に目を移してみれば、アフリカ系の移民が欧米のように多くないがために、この問題にわれわれがいかに関わるべきかについて、日本独特の問題が生じている。日本で切除廃絶を支援しているのは上述のWAAFだが、その活動について、たとえばアラブをフィールドとして第三世界の女性問題を研究している岡真理は、厳しく批判してきた。ポストコロニアリズムの思想にもとづく岡の議論を要約してみよう。岡によれば、日本のフェミニストは「同じ女」という立場で切除の問題に関わろうとするが、それはあまりにナイーブである。なぜならアフリカの女たちがみずからをエンパワーし切除廃絶を達成するのに不可欠なのが、経済的な自立だが、われわれ日本の女たちは、不公正な世界経済のなかでそれを妨げている側に属しているからだ。自分たちが深く関わっている経済・社会的な文脈から切除問題を切り離して非難するのは欺瞞である。さらに岡は、活動家が日本社会に切除問題を訴えるときに、アラブ・アフリカ文化を野蛮な文化として表象し、そしてそこに生きる女たちを犠牲者として表象し、それによってみずからを解放された自立した女として表象したいという欲望に無自覚であってはならないと警告する。

第三世界を専門とする岡の気持ちは、アフリカをフィールドとし、切除の問題を授業でしばしば取り上げる私にはよく理解できる。たとえば米国なら、アフリカにたいする否定的な言説が語られると、すぐにそれに対抗する言説が生産され、議論をつうじてより立体的なアフリカ像が構築され、切除の意味も多様に理解される可能性がある。ウォーカーが表象するアフリカと切除問題は皮相的であるという批判（Bass, Gourdine, Kieti, Nako, Obiora a, 荻原 a, 岡 bおよびc, Oyewumi b, 山下）は否定できないが、ウォーカーのような影響力のある活動家（しかもアフリカ系）が問題提起したことでいかに論争が活発化したかを考えれば、じゅうぶんお釣りが来るというものだ。しかし日本ではそうはいかない。「専門家」（活動家であれ、研究者であれ）とされる者が語るアフリカは、たいした批判もなく受け入れられてしまう可能性があることに、「専門家」はもっと自覚的でなければならない。とくに切除のようにアフリカのネガティブな面を話すときには、受け手があらかじめ持っているアフリカにたいする偏見を強化するだけに終わる危険性がある。授業で切除のことを取り上げると、とくに多くの受講者を対象として90分だけ話すような講義だと「日本に生まれてよかった」という感想が寄せられることがある。典型的には「たまたまアフリカに生まれただけでこんな目にあうなんて。同じ人間として（または女として）許せない。これは人権問題である」と続けられる。この率直な憤りの背後には、自分とアフリカを分け、アフリカを野蛮とすることで自分の文化の優越性（「日本に生まれてよかった」）を確認するという植民地主義的な態度が見え隠れする。そこでは、彼女らとわれわれの間の依存関係、支配関係は隠蔽され、彼女らは「たまたま」アフリカに生まれ、私たちは「たまたま」日本に生まれたという偶発的な関連以上に、両者は結びつけられない。その結果、社会・経済の関係に文脈づけられない抽象的な「同じ女」という関係が想定される。そして「同じ女」であることは、部外者であるが外から恩恵を施すことができる資格となる。われわれと彼女たちの関係性に思いいたらないこのような理解を再生産しているとした

ら、授業は切除問題の解決を遅らせているともいえる。なぜなら、切除問題の解決を阻んでいる最大の要因の一つは南北問題だからである。

もちろん岡の論にも問題はある。岡の論は、すべての原因を南北問題や富の偏在という大きなことに帰して、そこで思考を停止させ、そして活動も停止させてしまう危険性をはらんでいるのである。岡の論を授業で紹介すると、上の段落で挙げた反応とは対照的に「この問題に先進国のわれわれが口を出すのは『植民地主義的』なことであり、当事者であるアフリカ人しか関わるべきではない」という声が聞かれる。千田有紀が岡を「教条的」（130）と批判するゆえんである。岡は抑圧者としてのわれわれの当事者性を強調しているのにもかかわらず、このような反応が出るのはなぜか。それは、岡が問題とする南北格差はあまりに大きすぎて、個々人が具体的な活動をとおして実際に解決することができないような性質のものだからではないだろうか。切除問題にとどまらず、第三世界がかかえる問題のすべての根底には南北の不平等があることは疑いようもない。そして先進国のわれわれすべてが、このシステムを維持している罪人である。そのことを真摯に問いながら、問題に関わっていく必要性を岡は強調するのだが、いったいどうやってなのかは明確でない。岡の批判の言葉からは、岡の批判対象である日本の活動家たちにたいする具体的な提言は読み取れないし、切除を知って倫理的な責務を感じる若い学生も、岡のアドバイスを自覚や姿勢の問題として精神論的に解釈するしかないのではないか。

ただし上述のマイナス点を割り引いても、岡の懸念――支援活動が日本をふくむ先進国と第三世界とのあいだの善悪二項対立化を助長するのではないか――は強調してもしすぎることはない。[12]WAAFの例を挙げよう。WAAFの会報では、定期的にアフリカ各国の切除の事情がレポートされ、ガーナが取り上げられることもある。私にとってガーナは、親戚や友人や大切な人たちが暮らす土地、いつでも何度でも訪ねたい土地である。しかしレポートからは、絶対に住みたくない土地という印象を受けてしまう。おそらく会の最前線で活動し、現地のNGOグループの代表を日本に招い

てシンポジウムを実行したり、複数のNGOグループの活動を比較審査して日本で寄せられた基金を譲渡したりしているWAAFの主要メンバーたちにとっては、切除を受けたアフリカの女たちは顔の見える存在であり、廃絶へむけて努力する同志として尊敬しあっているのだろう。だが悲惨な切除の事情を外へ発信すると、彼女らのエイジェンシーは消失し、アフリカ文化は野蛮な文化として、切除は無意味な慣習として表象されてしまうのである。

以上のような問題は、WAAFという会員100名程度の小グループが、資金と人手の限界を抱えながら日本の廃絶活動を担っているかぎり、避けがたいことなのかもしれない。私自身はWAAFの一般会員であり、活動としては会報を読むことがおもで、勉強会（アフリカ事情を知る人から話を聞く）や出前講座（一般の人に問題を訴える）に参加する機会は最近ほとんどなく、その報告を会報で読むにとどまる。その立場から、日本の切除廃絶活動が陥りがちな日本をはじめとする先進国とアフリカの二項対立を避けるために必要なこととして、「ローカル化」を提言したい。

具体的には、第一に、啓蒙活動をするさいは、現在WAAFが提供している内容以上に、現地のNGOグループの活動方法を紹介することが必要だと考える。アフリカのある社会でどのような活動が有効かを知ることで、その社会のジェンダー文化を理解することにつながるだけでなく、そこから日本のわれわれも、自分たちのエンパワーメントの戦術を学べるはずだ。とくに一般へ向けて切除問題を発信する場合には、切除の悲惨さを訴えるにとどまることなく、パートナーとしての現地のNGOの活動の紹介に重きをおきたい。現にWAAFは、反FGM基金を開設して現地のNGOに資金援助をしており、その報告も会報でなされているところである。そのような南北のNGOどうしの草の根の交流の成果と課題を、切除問題に耳を傾けようという人には知ってほしい。WAAFのようなグループが持っている貴重な体験と情報を共有できるような、人的および財的なシステムを構築しなければならない。

そして第二に、これは自戒をこめて書くのだが、研究者が活動家と連携を深め、各民族グループの歴史、社会、経済にかんして蓄積された学術情報を両者が共有すべきだと考える。現在は、一方でWAAFが勉強会を主催して、切除をめぐるアフリカ事情を散発的に紹介し、他方で研究者はそれぞれの学会で成果を発表するにとどまっている。切除をめぐっては注目すべき事例報告が世界で発表されているにもかかわらず、日本ではそのインパクトが学界内にとどまっているのは、学者の怠慢と活動家の力不足を示す。研究の成果は学者のものではなく世のものであり、具体的で詳細な事例研究の成果を活動に生かせるようなネットワークが必要であろう。

いずれにしろ、切除をこのようにそれぞれの社会のなかでローカルに文脈化して理解することは、われわれ自社会の対象化につながり、われわれと彼女らとは、抽象的な「同じ女」としてではなく、別々の文脈においてではあるが共通した構造で構築された「同じ女」として、エンパワーメントの方策を共有し、グローバルに連帯していくことができるはずだ。そのためには、日本国内での活動家どうしの連携、研究者どうしの連携、活動家と研究者の連携が急務であり、このことこそじつは、アフリカの体験からわれわれが学ぶべきことなのかもしれない。

3．ジェンダー学関連の授業で切除を語る
――セクシュアリティのジェンダー化――

切除問題にたいする位置取りをめぐる以上の議論をふまえて、ここで、ジェンダー学関連の授業という枠組みでこの問題を取りあげることに焦点を絞りたい。授業で私が切除を取り上げる意図は、異文化のジェンダー構造を知ることで自文化のそれを批判的に見るのを可能にし、自己と社会の変革につなげるというところにある。授業をつうじて学生と接していて気づくのは、一般的にいって学生は、男女の社会役割については批判意識が高い一方で、身体差を根拠にして人を男と女に二分すること自体はほとん

ど疑問視しておらず、したがってみずからのセクシュアリティのありようを、社会的に構築されているものとして批判する態度に乏しいことだ。大半は20歳前後の若い学生たちにとって、セクシュアリティは大きな関心事であるが、そこにひそむ抑圧性を明確に言語化できずにいるのだ。これを私は大きな問題と感じており、セクシュアリティの社会構築性に目をむけるよう、すなわちセクシュアリティをジェンダー化するよう、学生に訴えてきたが、切除はこのための一つの切り口となると考えるようになった。授業で切除問題を問う私の立場を簡潔に記すならば、以下のようになろう。すなわち、「私も切除は同じ女として許せない。しかしそれは、切除され欲望を奪われた彼女らにたいし、彼女らに欠けているものを知る女としてみずからを位置づけ、自分が享受している女の権利を彼女らにも与えるべきだと憤っているのではない。私もまた、求められ産む女としてしかみずからのセクシュアリティを知らない女として、そしてみずからの身体から疎外された女として、彼女らの痛みを共有するのである。」以下、岡の文化をめぐる議論に不足しているセクシュアリティの視点から、切除とフェミニストの位置取りについて論じていきたい。

A．セクシュアリティの身体還元主義批判

先進国のフェミニストが切除問題に鋭く反応した背景には、第二波フェミニズムによるクリトリス復権がある（Gruenbaum 135-43）。フロイトの仮説――女は少女期のクリトリス性愛を抑圧し、膣性愛へと成熟する――に示されるように、近代社会では、女のセクシュアリティは膣にあるべきものとされ、クリトリスがつかさどる欲望は否定された。しかし1960年代後半、『マスターズ報告』により、クリトリスの刺激が女のオーガズムに欠かせないことが明らかになり（Masters and Johnson）、さらに70年代後半に『ハイト・リポート』が提供した広範なデーターによって、女たちの性生活におけるクリトリスの重要性がつぶさになった（Hite）。米国フェミ

ニズム運動の初期に小グループがガリ版で発刊したパンフレットから発展した『からだ・私たち自身』においては、クリトリスの刺激によって得られるオーガズムが、女のセクシュアリティの中心にすえられている（Boston Women's Health Book Collective）。

このように、女の自立したセクシュアリティのための決定的な器官として、クリトリスは礼賛されてきた。そしてだからこそ、それを切除されたアフリカの女たちは、性的に未熟ということになる。フロイトの説の逆転である。しかし現実はそれほど単純ではない。切除を受けた女たちのインタビューは、彼女らがあきらかにオーガズムを得ていることを示している。米国人ジャーナリスト、ハニー・ライトフット＝クライン（Hanny Lightfoot-Klein）の報告は、そのタイトルが示すとおりしばしばアフリカ文化にたいする無理解を示してはいるものの、そのインタビューの内容は、きわめて示唆に富んでいる。[13]陰部封鎖が一般的なスーダンで彼女が行ったインタビューから引用しよう（年齢、職業などは不明）。

> ぞくぞくして・・(略)・・とても幸せに感じて、彼を自分のなかに飲みこんでしまいたくなります。このうえなく甘い感覚がどんどん広がっていき、ついには私の身体全体をわしづかみにします。とても軽くなって、空に漂っていくみたいに思えます。そして眠りに落ちるんです。(86)

> 意識を失ったみたいになって、その瞬間、彼のことをものすごく愛していると感じます。身体全体に震えが来ます。ヴァギナが強く収縮して、かぎりない喜びを感じます。そのあとすーっと力が抜けて、生きていてよかった、この人と結婚してよかった、と思えるんです。(86)

それでもまだ、彼女らが語っているのは本当に私たちの感じているオーガ

ズムと同じなのかという疑問は残るだろう。同じ疑問を感じた文化人類学者のグルエンバウムは、そのことについて何度も尋ねて確認しようとした。すると「簡単なアラビア語もわからないのかと、いくらか業を煮やして」（141）ある助産師がグルエンバウムの手をぎゅっと握りしめて言った。

> 「私たちのなかにはほんとうに『行く』女もいる。電気みたいに感じるの。こういうふうに・・・」そう言って彼女［助産師］は、指を鋭くリズミカルに動かして、彼女の手に握られた私［グルエンバウム］の指に小刻みに力を加えた。私は私たちが同じことについて話しているのがはっきりとわかった。(141)

クリトリスがなかろうとも、性器に何度もメスが当たっていようとも、人は官能を得ることができる。

このことからわかるのは、セクシュアリティは性器だけの問題ではないということだ。先進国のフェミニストは、しばしばセクシュアリティの面に焦点化して切除を批判して、切除は多様な女のセクシュアリティを二分し、生殖に還元することで、女のセクシュアリティを管理するものだと糾弾する。しかしその所作もまた、還元主義を犯している。岡の批判にあるように、アフリカの女の多様な問題を切除という問題に還元しているだけでない。セクシュアリティという多面的な問題をクリトリスという器官に還元してもいるのだ。クリトリスを切られることと欲望を奪われることを同一視し、さらにそれを自己喪失と結びつけるような西洋的な考え方こそ、セクシュアリティをめぐる複雑な問題をクリトリスという小さな感覚器の有無に還元しているのではないか。セクシュアリティは性器の形状だけに左右されるものではない。もちろん、クリトリスは重要な感覚器なので、損なわれればオーガズムに達するのが困難にはなるが、快楽がなくなるわけではない。切除を受けた結果、その分胸が敏感になるという例も報告されているし（Koso-Thomas 12)、半身不随の障害者で、感覚が物理的

には麻痺していても、官能はある（Hyde 263, Gruenbaum 150による引用）。そしてなによりも、人が欲望するのは、社会が欲望を許すものを許す形で欲望するのであって、身体のある部位を刺激されて欲望するのではない。性器を切除された状況でのセックスが官能的だとされていれば、人はその状況で官能を得ることができる。陰部封鎖を受けた女が夫との性生活について聞かれ、出産後にはじめて夫と性交渉をもつとき、二人で膣がもとどおりに硬くなっていることをともに喜び、新婚初夜のときのようにいたわりあいながら、少しずつペニスを挿入していく（Gruenbaum 140）というような描写をする。おそらくは香木をたきしめ、香油を塗りあいながらであろう（縄田）。性器がどうあろうと、豊かな性生活を送ることはできる。あれほどの攻撃を性器に受けながら、なおも性生活を楽しむ彼女らの創造力に、私は女のセクシュアリティの奥深さを感じ、畏怖の念すら覚える。セクシュアリティの身体還元主義を批判し、セクシュアリティが性器の問題ではなく社会構築の問題であることをここで確認しておきたい。

B．セクシュアリティの男女二分化または異性愛主義批判

そのうえでさらに問題提起したいのは、この「性生活」の性質についてである。性生活についての男女のインタビューを比較すると、ジェンダーの非対称が明らかである。ライトフット＝クラインのインタビューによると、女たちの大半は夫との性生活を誇っている（本文はほとんど間接話法で書いてあるが、日本語で自然にするため直接話法で訳している。したがってこのままの言葉をインタビューを受けた本人が言ったとはかぎらない）。

> 最初の夫［故人］は、私の心と身体の反応をとても大切にしてくれました。ヴァギナの内部と縫合の傷の周辺はとても敏感でした。・・(略)・・私のほうから誘いをかける暇なんてありませんでした。・・(略)・・いつも夫は私を求めましたから。・・(略)・・

よほどの病気でないかぎり、断ることはありませんでした。私は、夫の喜びのためだけにセックスする恥ずかしがり屋さんのふりをするのが大好きで、夫の方もこのゲームをわかって、そんな私を愛していました。（37歳、助産師）（264）

夫とのセックスで３割ぐらいは強いオーガズムを感じます。キスされることは大好きで、唇にはとてもここちよい、ぞくぞくするような感覚があります。縫合の傷を優しくなでられるのも好きです。ペニスが子宮頸に当たったときに一番強い感覚があり、射精に導かれてオーガズムが起きます。そのときは強くヴァギナが拍動し、鎮静剤をうたれたかのようになります。オーガズムは挿入後20分ぐらいで起きます。残り７割は、セックスを長引かせても、セックスを繰り返しても、クライマックスを得ることはありません。そういう時は、とにかく身体が疲れているんですね。それでも夫の身体と触れ合うというだけで、セックスの後は幸せに感じ、ほっとします。ちょっとさみしい気もしますが、そういうものだと思っています。私の身体は今以上に反応できないのでしょう。

夫とはじゅうぶん気持ちを伝えあっていますし、性的な面だけでなくあらゆる面で、彼は私を満足させるよう気を配ってくれますが、はずかしくて私のほうから直接誘いをかけることはありません。そんなことは恥ずべきことだと教えられてきましたから。だからその気になったときには、［相手を求める合図として一般的な］香を使うんです。彼はすぐに理解して、私の合図にいつも答えてくれます。（29歳、看護師）（255）

それにたいし、男のインタビューは次のようなものである。

セックスのときは、割礼を受けてない女の方が能動的です。動きや

反応もまったく違います。割礼を受けている女は多くを失っていると思いますね。妻の快楽はほとんど気持ちの上でのものという感じがします。割礼を受けていない女と比べれば、身体の反応は弱いです。(28歳、内科医)(286)

割礼を受けていない女は要求をはっきりと伝えてきます。何をしてほしいのかを、行動や言葉で示すわけです。割礼を受けている女がもっとも心を砕いているのは、ひたすら男を満足させることのように思えます。そのせいでこちらは楽しみが薄れてしまいます。相手が何を望み、何がここちよいのか知ろうとしても、なにも言ってくれませんから。このせいでとても欲求不満になりますね。(28歳、医師)(280)

切除の度合いの少ない女との性行為では、完全な、生身の女を相手にしている気がします。[陰部封鎖が一般的な]スーダンの女が相手だと、生身の女としているという気がまったくしません。彼女からは何もしないし、そこに寝転がっているだけです。木の塊みたいに。・・(略)・・もちろん、私の経験はセックス・ワーカー相手がほとんどだからで、恋人だったらいくらかましですが。(30歳、保健所員)(287)

男の方は、切除を受けた女と受けていない女との両方と性行為を経験することが許され、冷静に比べて分析している。女の側が細かく描写している性反応を読み取ろうとしないその態度は、選ぶ立場にある傲慢さを感じさせる。それにたいし女の方は、夫とのセックスを至上のものとし、そのかけがえのない喜びを夫と共有しているつもりでいる。一般的にイスラム教では、夫婦間での性的快楽を奨励することからすると、これが「正しい」セクシュアリティのあり方なのであろう。男は切除を受けた女が無反応だ

と感じても、女の方は、与えられた社会状況と身体状況のなかで、性的に充足しようとしている。女の喜びへの執着、一方でそれを切り捨てるかのような男の冷淡な態度――男女のこの落差から、なにがわかるだろうか。

女が夫との幸福な性生活を語るインタビューをいくつも読み、そしてそのあとに男の突き放したようなインタビューを読むと、女たちが語るかぎりない喜びと満足の背後に、不安感が現れてくる。それは、性的に満ち足りた「正しい」女であろうとする強迫観念と、そこから外れることへの恐怖である。男にとって自分は十分に女らしく魅力的なのだろうか、自分が男に求められなかったらどうしよう――この不安は、排他的かつ非対称な男女の二項対立が支配するこの世で女であることからくる不安であり、その不安を私もまた共有している。切除を受けないと男に求められない、セックスもできない、そして不安を感じるが、それなら切除を受ければ、男が好む性器が手に入り、男に求められて、セックスして、安心し、満ち足りるはずだ。そのための切除のはずが、この不安は、たとえ切除を受けて男にとって望ましい性器を得たとしてもなくならない。[14]欲望は性器の問題に還元することはできず、男に欲望される十分な女であるかどうかは、欲望する男に決定権があるからだ。切除をする社会でかりに切除が廃絶されても、女はやはり不安を感じ、別の形で社会に受け入れられ、男に求められるような身体を手に入れようと苦しむだろう。ちょうど私たちがそうしているように。[15]女は日々、「あなたのその身体は、そのままでは十分に女ではない」というメッセージにさらされている。だから女は、切除を受けていようといまいとつねに問うのだ。「男に選ばれなかったらどうしよう」「男はこれまでの女と私を比較するだろう」「私はこのままでは性的に不完全なんじゃないか」「私の性器は人と違うんじゃないか」「だれも私とセックスしたがらなかったらどうしよう」「男はこの私の身体を欲望してくれるだろうか」「もっと硬くて乾いた性器がほしい」「もっと柔らかで大きな乳房がほしい」「すべらかな肌がほしい」こうして女は身体を加工し、加工することをとおして女となる。加工された身体はかくして、女で

あることの意味を体現（エンボディ）するに至る。そしてくりかえすが、異性愛主義社会で女であるとは、男に求められることである。男に求められなかったら女じゃない。女じゃないなら人間じゃない。その意味で、切除を受けた彼女らの性生活は、私たちのそれが荒涼としている程度に荒涼としている。

切除は、身体レベルで男女をより明確に性別化するための施術であることは、米国で現在広く行われている、中性（インターセックス）の子どもにたいする性適合手術と関連づけるといっそう明らかになる。[16]文化人類学では「割礼」の象徴的な意味について、男の割礼は男に備わる女性的な部分をなくし、女のそれは女に備わる男性的な部分をなくすのだと論じられるが、米国の性適合手術も同様である。みずからもその手術を受けさせられた活動家、シェリル・チェイス（Cheryl Chase）によると、米国では1950年代以降、小さすぎるペニスや大きすぎるクリトリスを持って生まれた子どもの性器手術が広まり、現在では毎年数千人の規模で行われているという。[17]身体に暴力を加えて人を男女の性別システム内に封じ込めるという意味で、アフリカの切除と米国の性適合手術は共通する。そしてまた日本社会も、男女の二分システムからの逸脱を許さないことでは例外ではない。性同一性障害の当事者であり活動家の木本葵は「自分が男の身体なのに女でいたいことが周囲に知れたら、死ななきゃいけないと思っていた」と言う。身体と意識の性別がずれている者は男とも女とも分類しがたく、したがってこの社会で生きることを許されない。この異性愛主義の強制力は性同一性障害者、中性者、ホモセクシュアルだけに働くのではもちろんなく、われわれすべてを規定するシステムであることは言うまでもない。それゆえに私が感じる「女であることの不安」がある。私もまた、この異性愛中心社会で女である以上、男に求められる身体をもつ者として存在させられているのであり、自分の身体から、そして欲望から、疎外されている。切除に反対して唱えられる「みずからの身体を保持する権利」は、法的な概念としては成立するが、厳密な意味で、社会の刻印を逃れたそのままの身体を持っているものは、この社会でだれもいない。

C．セクシュアリティの生殖と欲望二分化批判

ただもちろん、私が日本社会に女として生きていて、そこから不安を感じるとしても、じっさいに多くの女が性器を切除されているという状況とは、大きな隔たりがあるだろう。しかしそこで、性器切除を女のセクシュアリティ支配の究極だと批判するよりも、すべての社会が男性中心主義かつ異性愛中心主義であるなかで、なぜある社会では、それが女一般の性器切除という形を取って現れるのかについて考える方が生産的であろう。なぜならそれによって、その社会独特のセクシュアリティにまつわる意識と慣習、男女の力関係の仕組みがあきらかになり、切除廃絶につながるからだ。そしてそこから、私たちもまた、自社会を批判し変革する契機を見つけられるかもしれないからだ。

アフリカのセクシュアリティに特徴的なことは、生殖がきわめて重要だということであろう。アフリカの多様性は認めたうえで、この点は多くのアフリカ研究者が一致するところである。[18]切除に関連づけていえば、たとえばクリトリスの包皮を切除するナイジェリアのヨルバにとって、女性器は出産の象徴であり、その一部を切除して地に供する見返りに、多産を授けられると考えられる（Babatunde）。またスーダン北部で行われる陰部封鎖は、子宮をしっかりと閉じその口をなめらかにして清めることで、女を多産に導くものと解釈可能である（Boddy）。クリトリスおよび小陰唇の切除を行うシエラレオネのコノにかんしても同様で、切除は女から男性性を取り去り、子宮が司る生殖力を高めると解釈できる（Ahmadu）。ヨルバの事例ではクリトリスの位置づけが不明確ではあるが、いずれの場合も、女のセクシュアリティを男のそれとは対照的に、生殖の側に指向させるという点では共通する。アーマドゥの興味深い指摘によれば、西洋文化においては男女の性別は文化の外で決定されるものとされ、したがって自然で不可変のものと考えられているのにたいし、アフリカ社会では、子どもの未分化な自然状態の性を社会的、文化的に操作してはじめて、人は男また

は女として性別化され、それぞれの役割――女の場合は欲望を捨象した後の生殖――を果たしうるという（296-7）。

しかし一般的にいって、女のセクシュアリティを欲望と生殖に二分することは難しいし、現代アフリカにおいてはとりわけそうである。ヨウ・ヘレ＝バレ（Jo Helle-Valle）によると、セクシュアリティは文脈におうじて変化するものではあるが、現代アフリカ社会ではとくに、人は単一のセクシュアリティを持ちにくいという。というのも現代アフリカ社会では、矛盾する要素がつねに競合しているにもかかわらず、人はそれを統合するような力――多くの場合は金銭――を持っていないので、セクシュアリティがインディヴィデュアルな（分けられない、統合された）ものではなくディヴィデュアルな（区分された）ものとして現れてくるという。たとえばライトフット＝クラインによるインタビューにしても、欲望に興味を持つ西洋人が知りたいことをアフリカ人が先取りして答えた結果だと切り捨てるのではなく、あれもまた、欲望や快楽を生殖ほど重視しない社会に生きる彼女らの、重要な一面を示すものと考えるべきであろう。[19]歴史的にいえばアフリカは、生殖を称揚する伝統が下地にあったうえで、イスラム教、キリスト教と出会った。そしてさらに植民地支配を経験する。ヨーロッパ側の二大勢力である教会（その内部の数々の宗派、さらにはヨーロッパ人宣教師とアフリカ人改宗者）と政府（その内部の中央政府と地方政府）は、アフリカ人のセクシュアリティ管理という面でかならずしも一致した態度をとっていたわけではない（Becker, ヘイズ, Thomas）。さらに独立後は、国家が「伝統」を動員した場合もあれば（Becker）、社会主義的な中央集権化にたいして少数民族が「伝統」で抵抗した場合もある（宮脇）。と同時に、近代化にともなって、ヨーロッパ的なロマンティック・ラブはエリートのあいだで浸透していき（Oppong）、現在では、その思想は庶民のあいだでも一般的になってきていると思われる。たとえば1990年ごろからナイジェリアやガーナで盛んに制作されているビデオ映画では、夫婦間のロマンティック・ラブが理想とされる。夫婦の愛が、夫の母や夫の恋人が使う

土着のまじないによって危機にさらされるが、キリスト教の奇跡によって解決される。批判対象であるオカルトの表象が映画の牽引力となると同時に、特撮を使って表現される奇跡も映画の見せ場となっており、愛／欲望／生殖と伝統／近代の関係は単純ではない（Meyer）。[20]現代でもアフリカのセクシュアリティの中心が生殖にあるのは間違いないが、生殖をめぐる欲望と力関係はいまだ明らかではない。

以上のような現代アフリカ独特の社会構造を考慮すると、「切除は男による女のセクシュアリティの管理の究極の形である」という言葉は間違いではないにしろ、切除廃絶にむけては「男」と「女」と「セクシュアリティ」の歴史化と社会化が必要だということがわかる。これまでのアフリカのジェンダー研究では、セクシュアリティの面からの分析が不足していたが（Arnfred 59）、今後は、綿密なフィールドワークに基づく各民族グループのセクシュアリティの研究、それを歴史的な文脈におき、イスラム教やキリスト教との接触、植民地支配やグローバル化などによるセクシュアリティの変容を探る研究、国際社会の一員としてのアフリカ各国の性政策についての研究、現代文化におけるセクシュアリティ表象の研究などが必要になってくる。そしてそれは、HIV／エイズが猛威を振るうなか、始められている。

フェミニストの文学研究者としての私の今後の仕事は、アフリカのセクシュアリティについての社会科学の成果を借りながら、文学作品のなかで女のセクシュアリティとアイデンティティを分析することである。上述した「同じ（男に欲望される存在としての）女として許せない」という「共感」は、学問的に厳密な調査によって実証されたものではない。したがって、彼女らと一体化し彼女らを専有したいという私自身の欲望の現れである可能性はある。この立場は現時点での私の出発点であり、今後、フェミニスト文学研究者として作品を解釈することをつうじてこれを立体化し、修正していきたい。私のアフリカ文学の読みは、これまでもずっと、グローバルな共感をローカルに修正し、私たちと彼女たちが住む世界を立体化す

る試みだったし、これからもそうであろう。

もうひとつの課題は、切除を理解するさいの文学の役割を問うことだ。授業で半期をつうじて切除を取り上げるときは、文化人類学、歴史学、ジェンダー学の諸論文、切除を受けた女による手記、インタビューなどを読むのだが、これらを読んだ学生は「私たちと彼女らの違い」に圧倒され、それ以上考察を進められないことがある。しかし切除のことに触れた文学作品を読むと「彼女らも私たちと一緒なんだ」という感想を持つ。切除のような問題を文学によって「理解」するとはいったいどういうことなのか。他の理解とどう違うのか。このことについても考えていきたい。

4．切除を社会に文脈化する実践――トスタンの活動を例に――

A．トスタンの紹介

第3節では、ジェンダー学関連の授業で切除を扱うときの基本姿勢として、異性愛中心社会でのセクシュアリティの構築という問題構制のなかで切除をとらえることを提案した。じっさいの授業内容としては、抽象的な枠組みについて語るだけではなく、第2節の最後に提言したローカル化の実践として、現地のNGOグループの活動を紹介している。そしてそれは、第3節の主張であるセクシュアリティの社会構築性を示す好例でもあるため、本論でも紹介したいと思う。とりあげるのは、切除廃絶にむけてめざましい成果を挙げているセネガルのNGOである。[21]トスタンと呼ばれるこのNGOは、1997年にはじめて共同体全体での切除廃絶宣言を達成して以来、2001年までに174の村、2003年12月までに合計1271の村での廃絶宣言を導き出している。1999年のセネガル国会での切除犯罪化は、最初の宣言が引き金になった（Lockhat 76-7, ECOSOC 8）。その成功の鍵は、ジェンダーに視点をおいた社会改革の一環として、切除廃絶運動を行ったことにある。

1976年	ボル・ムバイェ（Boll Mbaye、セネガルの俳優で口承文化専門家）とモリー・メルチング（Molly Melching、米国の教育学者でダカール大学を卒業し平和協力隊員として活動）が、農村の子どもを歌・劇・ゲームなど、伝統芸能をとおして教育するセンターを設立。ラジオプログラムで健康や環境などについて子どもを啓蒙
1982年	ラジオプログラムを聴いて、子どもだけでなく大人も村で議論するようになったため、伝統芸能を用いて成人教育をするための団体として「トスタン」を結成
1991年	米国でNGOとして登録。ユニセフの援助を得る
1996年	第７、８単位（女と健康についての継続単位）開発
1997年	共同体での切除廃絶宣言をはじめて導く。米国大統領夫人（ヒラリー）訪問
1998年	米国大統領夫妻（ヒラリーとクリントン）訪問
現在はマリ、スーダン、ブルキナファソ、ギニアなどでも活動	

表２：トスタン活動年表　トスタンの公式サイトをもとに著者が作成

トスタンの歴史は表２のとおりで、重要なのは、トスタン設立の趣旨は切除廃絶ではなく、伝統芸能を用いた成人教育だったことである。現在でこそ切除廃絶で注目されているが、もともとトスタンは、識字・算術教育および女のエンパワーメントのための基礎教育などをして、地域で成果を挙げてきた。よそ者で、しかも一つのことだけに関心を持っているというのが、一番信用されないのである。

そのようなトスタンが方針として掲げているのは、①セネガル人スタッフとともに、現地の言葉で、歌、ダンス、詩、劇など、アフリカの伝統芸能を取り入れ、楽しく学ぶこと②外からのおしつけではなく、参加者が、自分の共同体で具体的な問題を見つけ、その解決方法を探るという参加型の教育をすること、である。植民地教育の流れをくむ公の学校教育のやり方やイスラム学校での教育方法は、一方的に教えこむ方法だが、参加型こそ、アフリカの伝統的な問題解決の仕方である。いつも使っている言葉とメディアを用い、皆で経験を分かち合い、交渉と対話をとおして合意に達

するという伝統的な方法をとったからこそ、トスタンのトレーニングは人々の意識と行動を変容させるのに有効だったといえる。

トスタンが提供する学習プログラムは、６つの基礎単位（表３）と２つの継続単位から成る。週に３日、各２時間のトレーニングをつうじて学び、６つの基礎単位を修了するのに１年半かける。切除については継続単位で扱う。継続単位は、女と乳児の健康のためのトレーニングを開発しようとして始まった。開発に先立ってスタッフが村で関心事を調査すると、政府の優先順位では下位だったが、月経、閉経、切除、中絶、保健職員との関係、女にたいする暴力が女の関心事だった。政府と女たち両者の一致した関心事は、妊産婦死亡率であった。切除を含む第７単位の詳細とその成果については表４を参照されたい。

B．最初の廃絶宣言

最初に廃絶宣言をした村での事例を紹介しよう。この村ではもともとトスタンが活動しており、衛生教育を受けた女たちが石鹸製造事業などを手がけていた。このような背景があって、切除についても女たちは学習をした。女たちはそれまで切除について公の場で話したことがなかったが、これまでのトスタンでの活動をつうじて親密な雰囲気が育っており、切除についても自分の経験を語りはじめた。そしてしだいに討論グループの規模を大きくしていき、切除擁護派とどう議論をしたらいいか、長老や政府関係者をどう巻きこめばいいか、などをロールプレイによって演習した。たとえばあるメンバーが長老役をして、別のメンバーが相手を長老だと思って切除の話題を切り出し、反対されて反論し、という具合である。ロールプレイという手法は、実際にその場面に直面したときに有効に対処でき、参加型のトスタンでのトレーニングでしばしば使われる方法のひとつである。

こうして自分たちのあいだで問題化した内容を、女たちはつぎに社会化

単　位	算術学習	単位で学習すること	単　位　の　効　果
第１単位	１～９までの数字	問題解決の仕方（問題を見つけ、これまでの取り組みを評価し、あらたな解決方法を見つけ､実行し、評価する）	井戸や脱穀機を修理した。識字教育センターを設立した。家庭菜園プロジェクトを実行することで、子どもの栄養状態を改善し、家計を助けた。少ない薪ですむように炉を改良し、環境負荷を減らした。
第２単位	足し算、引き算、10以上の大きな数字	公衆衛生	石鹸で手洗いをするようになった。石鹸作りのプロジェクトを実行し、地域に石鹸を供給した。村で一斉清掃の日を決め、不参加者には罰金を科すようになった。
第３単位	繰越算	下痢（子どもの最大の死因）と予防接種	下痢が減り、下痢による脱水症状はなくなった。女が予防接種をカレンダーの予定にそって行うようになった。
第４単位	掛け算	経営方法（村のプロジェクトを例に）	女が自分たちのプロジェクトを自分たちで管理するようになった。帳簿付けを徹底し、透明性が確保された。
第５単位	割り算	リーダーシップ	性別、年齢、地位ではなく、能力におうじて指導者を選ぶようになった。地域の有力者と村人の関係が変化した。女が行政官と会って議論するようになった。参加者が自分たちの指導者に説明責任を求めるようになり、腐敗を告発するようになった。女が地方政治に積極的に参加するようになった。女が公の場で発言し、決定に加わるようになった。女が指導的な地位を占めるようになった。参加者が近隣の村で教育プロジェクトを実行した。女が情報を得られる場所と情報の活用方法を理解するようなった。
第６単位	帳簿付けをつうじて、これまでのおさらい	プロジェクトの実効性の予測と評価の方法（収入につながるプロジェクトを実行する。破産しないように計画を立てる）	女がローンを組んで、脱穀機を買ったり、小規模の商売を始めたりするようになった。

表３：トスタンの基礎単位　　トスタンの公式サイトをもとに著者が作成

週	回	内　　容
1週	1	第７単位にたいする期待と不安を語る。第７単位の目的を知る
	2	健康を定義する。村の女の現状。村で行われている健康にいいこと、悪いこと
	3	セネガル、アフリカ、世界での女の現状。統計にもとづいて重要課題を考える
2週	4	女の人権。健康にたいする権利
	5	予防の重要性
	6	身体の発達：思春期と月経
3週	7	女の性。もっとも人気の高い回のひとつ。ロールプレイで夫との話し合いを演習。切除の有無にかかわらず、夫婦関係が改善するなどの効果あり
	8	健康をテーマに詩を作る
	9	妊娠１
4週	10	妊娠２
	11	出産
	12	中絶
5週	13	閉経
	14	女性性器切除
	15	女にたいする暴力
6週	16	これまでのまとめ
	17	性病
	18	HIV／エイズ
7週	19	地元の保健職員との関係
	20	村の健康問題を解決する方法を考える
	21	村の健康協会を設立する（目的、活動内容）
8週	22	村の健康協会を設立する（組織、機構）
	23	第７単位のおさらい
	24	第７単位の評価

第７単位の評価
人権を行使し、子どもの権利を擁護する具体的な方法を理解した 母乳育児をするようになった 出産に備えて、精神的、経済的な準備をするようになった 計画出産をするようになった 性について夫婦や親子で話すようになった 閉経後の妻にたいする差別を村の指導者に訴え解決した 性器切除や若年結婚をやめさせた 栄養の知識にしたがって子どもの健康を考えた献立をするようになった 子どもを過剰に働かせた者に村で罰金を科すようになった 都会で家事労働者として働かせていた娘を呼び戻すキャンペーンを村でおこなった 予防接種の徹底 村人が健康にかんするデーターを取り、分析するようになった 村で保健センターを設立した 詩や物語を書いて自己表現するようになった

表４：第７単位の内容と評価　　トスタンの公式サイトをもとに著者が作成

していった。トスタンはトレーニングが終わったあと、一人一人の参加者が、友人や知人にその日の学習内容を伝えることを奨励する。伝える内容をメモにまとめることで、読み書き能力を高め、問題をより正確に把握できるようにするためである。また、新しい知識をもたらすことで、周囲の尊敬を勝ち得、自分も自信を得ることができる。これを切除のトレーニングにも使った。すると女たちはしだいに、知人だけでなく、より大きな規模で学んだ内容を伝えるようになった。たとえば女の会合や村の会議で問題を訴えたのである。すると、産婆や宗教指導者でも廃絶に賛成している者がいることが判明した。それに力を得て、女たちは村のあちこちで、劇や詩でもって切除問題について訴えた。するとそれを観た村人たちのあいだで、切除についての議論が起きた。こうしてついに、女たちの主導のもと、1997年７月31日が意識改革の日と定められ、その日村人たちが集会所に集まり、宗教指導者、村の長老や地方行政官のスピーチに続いて、村全体で廃絶宣言がなされたのである。この成果にはトスタンのスタッフも驚いたが、じつはそれ以前にも、この村では、児童労働の廃絶運動で同じ方法で成果を挙げていた。すなわち切除廃絶運動は、大きな社会改革運動の一環として行われたのである。

このように、草の根で意識改革をおこなった後、村単位で公に廃絶宣言するという点が重要である。ゲリー・マッキー（Gerry Mackie）は纏足と切除を比較して次のように指摘する。切除のような社会慣習は、友人どうしの連帯のしるしであり、結婚の条件でもあることから、個人や家族単位ではなく、村全体、地域全体が公に廃絶を宣言しないと意味がない。個人的には、健康に害があるし死ぬ危険性すらあるので、娘には受けさせたくないと思っても、周りが行っていて、行わないと社会のなかで孤立し、結婚相手も見つからないとすれば行わざるをえない。行うと娘は死ぬかもしれないが、行わないと社会的には死んだのも同然なのである。娘に教育を受けさせて、結婚しなくても自立して生きていけるようにしてやるだけの経済力があれば別だが、その場合でも、切除を受けたることで得られる

アイデンティティに替わるほどの安定したアイデンティティを、娘が得ることは難しいだろう。

トスタンの活動が新しいアイデンティティを提供しえたことを示すエピソードが、モリー・メルチング（Molly Melching）によって紹介されている。切除をふくむ成人の儀式はどうするのかという問いに、ある参加者は「トスタンの活動こそが成人の儀式となる」と答えたのである（162-3）。成人の儀式は、同年代の少女を集めた親密な雰囲気のなかで、年長の女の主導のもと行われる。これは共同体の結束を高め、社会の一員として権利を行使し、責任を果たす一人前の人間となるよう教育を施す場である。われわれ先進国の社会が有効な性教育の手だてをもっていないことからすると、性教育だけにとどまらない全般的な社会教育としての成人儀式の有効性は、疑いようもない。しかしこの伝統的な教育方法に問題がないわけではない。女たちの伝統的な組織といえば聞こえがいいが、年上の女が少女を支配しその行動を監視するという長老支配の側面は否定できない。そこで行われる性教育は、伝統的な男性中心社会を出し抜き、そこで生き残る術を教えるものであろうが、変わり行く社会に対応できるだろうか。しかもじっさいには、植民地化、近代化による女たちの伝統的な組織の衰退にともなって儀式は形骸化し、全般的な社会教育はできなくなっている場合が多い（Dorkenoo 39-40）。新しい社会環境に組みこまれた、より民主的な教育方法が必要であろう。[22]そしてトスタンのような活動はそのような教育機会を提供しうる。[23]トスタンの参加者は、活動をとおして経験を打ち明けあい、考えを語りあい、意識を高めあってきた。人の知らない知識を分かちあった。たがいの信頼にもとづいた強い絆を作って、社会を変えるようなリーダーシップを身につけ、同じ目的をめざして協力し、実際に社会を動かした。そしてこれこそが、成人の儀式が共同体の成員に授けていたパワーだったはずである。

以上のトスタンの活動についての説明から、本当に有効な切除廃絶運動は、切除をやめさせるだけでなく、広くジェンダーの構造を変え、セク

シュアリティのあり方も変えていき、文化を変容させるということがわかる。人々のアイデンティティを規定する切除のような慣習を廃絶するには、セックスの作法、男女のあり方などすべてを洗い出し、あらたなセクシュアリティのあり方を模索し、自己と社会を定義しなおすことが必要だし、切除を廃絶する過程で、そのようなことにならざるを得ないはずである。そして廃絶のために活動すること自体がエンパワーをもたらし、ジェンダー構造の変容につながる。トスタンの活動ではまさにそのようなことがおきたのだった。

さいごに

セクシュアリティは個人的に見えて社会的なものであり、身体は自己性と他者性の両方をあわせ持つ。だからこそ、アフリカの女（しばしば幼い少女）という弱者は、その身体とセクシュアリティを社会から――自社会の権力者から、さらには支配的な位置にいる外の社会から――侵害されてきた。そして切除廃絶運動は、アフリカの女がアフリカの文化を批判すると同時に、アフリカの文化批判をも批判するという困難な二つの営みをとおして、みずからの声を見つけ、文化を変容させる過程そのものだった。

他方で、彼女らの声を聞こうとすれば、私たちもまた変容を経ることになる。かつて19世紀には、ヨーロッパの博物館でアフリカの女が展示され、その大きな臀部が見世物になったが、そのことに言及しながらナイジェリアのフェミニスト、オビオマ・ナエメカ（Obioma Nnaemeka）は「19世紀に問題とされたのはアフリカの女の尻だった。現在議論になっているのはもうひとつの身体部部位――ヴァギナだ。・・（略）・・いったいお次はどの部位が問題になるのだろうか？」（179）と問う。「私たちの生活を知らないのに、私たちの性器についてつべこべ言うな」――この批判に私たちが応えるには、アフリカの女のセクシュアリティをローカルに社会化し、それによって私たちのセクシュアリティもまた、ローカルに社会化したう